



Title	漢藏合璧西夏「黒水橋碑」再考
Author(s)	佐藤, 貴保; 赤木, 崇敏; 坂尻, 彰宏 他
Citation	内陸アジア言語の研究. 2007, 22, p. 1-38
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/17406">https://hdl.handle.net/11094/17406</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 漢蔵合璧西夏「黒水橋碑」再考\*

佐藤 貴保・赤木 崇敏  
坂尻 彰宏・呉 正科

## はじめに

2006年9月5日、著者のうち赤木崇敏と坂尻彰宏は、森安孝夫・大阪大学大学院教授を団長とする調査団に同行し、中国甘肅省の張掖市を訪れた。赤木・坂尻は当地での文物・史跡調査の間に、張掖市甘州区博物館(大仏寺)を訪れ、敷地内の歴史文物陳列庁に展示されている「黒水橋碑」<sup>(1)</sup>の現物を調査する機会に恵まれた。この碑文は、西夏時代(11世紀～13世紀)の原碑が残る数少ない石刻史料のひとつであり、漢文とチベット文との合璧碑である点やその内容を見ても、同時代の史料としてユニークな存在であるといえる。今回の調査では、張掖市甘州区博物館の呉正科副館長から許可を得て、原碑の調査、写真撮影、拓本採拓を行うことができた。また、呉副館長は写真と拓本との公刊を快諾され、論文の発表にあたって以下のような序文を寄せていただいた。序文には本碑の由来と関係する張掖地方の伝説とが紹介されている。

## 序文

乾隆四十三(1778)年甘州知府鍾賡起撰《甘州府志》之《艺文》中刊登该碑汉字碑文, 名为《黑河建桥敕》, 并注明作者为“夏主李仁孝”。立于西夏乾祐七(1176)年, 原来在甘州下龙王庙, 即今312国道与黑河交接之东北侧。《甘州府志·营建·

---

\* 荒川慎太郎(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所准教授)・今枝由郎(フランス国立科学研究センター(CNRS)主任研究員)・武内紹人(神戸市外国語大学教授)・吉田豊(京都大学大学院教授)の諸氏には本稿執筆にあたり御助言を賜った。ここに記して深謝する。

(1) 本碑には碑額がなく、研究者ごとに異なる名称が与えられている。本稿では最も簡潔な名称である「黒水橋碑」を使用することとする。

坛庙》“下龙王庙”条云：“城西十余里，西夏乾佑七年，夏主李仁孝有敕谕碑，元末燹。明洪武中建，嘉靖二十五年，巡抚扬博有《祈雪文》，二十七年有《祈雨文碑记》……”。清顺治十四（1657）年分巡西宁道按察副使扬春茂纂《重刊甘镇志》之《建置志·祠祀》“龙王庙”条云：“有三。一在城西南八十里，张掖河水经流处，旧名河湊神庙，前有水涡，人小出大……一在西南二十里，一在城西八里，元季兵燹，洪武二十五年重建……”。该碑大概在民国时期迁入甘州城内，陈列在二郎庙，当时名为“张掖民教馆”。1945年9月，国民党中央研究院·中央博物院筹备处和北京大学文科研究所联合组织的西北科学考察团历史考古组来张掖开展考古调查和发掘，参加者有向达·夏鼐·阎文儒等，《社会科学战线》1987年第1期刊登阎文儒文章《河西考古杂记》（下）中记述：“城东北隅有二郎庙，今为张掖民教馆。内有‘西夏告黑水河诸神敕之碑’，惟《西陲石刻录》云‘闻碑阴有西夏文’实则为番字”。

碑体为青砂岩质地，顶端作梯开，碑高1.17米，宽0.74米，厚0.19米。碑面边刻缠枝莲花纹为边饰，左上角刻手捧供养物的菩萨像。碑文汉藏合璧，碑座高0.26米，宽1米，厚0.55米，四侧刻仰覆莲瓣图案。

该碑碑座和碑面上的供养菩萨均为佛教艺术风格，究其原因，与“贤觉圣光菩萨”的历史传说有关。

相传，西汉昭武县（今张掖临泽县）有一位姑娘，自幼随父母耕织于黑河旁，目睹无数生灵被河水吞没，便立誓修桥济世，从十几岁开始游说·筹资·备料·艰辛募捐了七·八年，最后经过三个多月的辛劳修建，大桥快竣工时，河水突涨，将桥冲毁，姑娘坐在桥上不肯离去，随水而逝，乡民怀念她的功德，称为“仙姑”，并修庙祭祀。汉武帝元狩中，骠骑将军霍去病率军西征匈奴时，被黑河所阻，忽见一绯衣妇人出现在空中，拔下头上银簪一画，黑河上便立刻出现一座大桥，汉军迅速过河，后来汉武帝封仙姑为“平天仙姑”，今庙尚存。民国三十一年高季良·赵毓瑗等纂《创修临泽县志》之《舆地志》“合黎仙迹”条中转载《仙姑庙碑记》：“仙姑庙，县城东北三十里边域内，土人云其骸在焉，……合黎山，在庙之北，农人掘出敕封平天仙姑铁牌。……武帝命骠骑将军征讨，师回，为黑河所阻，浑邪王率精兵万骑，

欲图掩袭，方惶迫间，见绯衣妇人指挥前导，由桥过河，及浑邪王至，桥与妇人皆不见，霍将军方知仙姑菩萨灵佑，遂奏武帝，大其庙”。修桥既然算作是大慈大悲的菩萨功德，故石碑亦刻供养菩萨以歌颂，刻莲花底座以树立。（呉正科）

## 【日本語訳】

乾隆四十三（1778）年の甘州知府・鍾廣起（編纂）『甘州府志』芸文には、この碑文の漢文面を載せ、「黒河建橋勅」と名付けて「夏主李仁孝」が碑文の作者であると明記している。碑は西夏の乾祐七（1176）年立石で、もともとは甘州の下龍王廟にあり、その場所は現在の国道 312 号線と黒河の交わるところにあたる。『甘州府志』宮建・壇廟・下龍王廟の条には「城西十余里，西夏乾祐七年，夏主李仁孝有勅諭碑，元末燹。明洪武中建，嘉靖二十五年，巡撫楊博有「祈雪文」，二十七年有「祈雨文碑記」……」とあり，順治十四（1657）年の分巡西寧道按察副使・楊春茂（編纂）『重刊甘鎮志』建置志・祠祀・龍王廟の条には「有三。一在城西南八十里，張掖河水經流處，旧名河瀆神廟，前有水渦，入小出大……一在西南二十里，一在城西八里，元季兵燹，洪武二十五年重建……」とある。この碑文は，おおよそ民国のころに甘州城内に移され，当時「張掖民教館」であった二郎廟に陳列された。1945 年 9 月に，国民党中央研究院，中央博物院籌備處と北京大学文科研究所の連合組織である西北科学考察团歴史考古組が張掖を訪れ，考古調査や発掘を行なった。参加者は向達，夏鼐，閻文儒などであった。『社会科学戦線』1987 年第 1 期掲載の閻文儒「河西考古雜記」（下）の記述には「城東北隅有二郎廟，今為張掖民教館。内有「西夏告黒水河諸神勅之碑」，惟『西陲石刻録』云「聞碑陰有西夏文」實則為番字」とある。

碑石は青砂岩で，頂部は台形，高さは 1.17 m，横幅は 74 cm，厚さは 19 cm である。碑面の周囲は纏枝蓮花紋で飾られ，上部の左右の角には供物を捧げ持った菩薩像が刻まれている。碑文は漢文とチベット文の合璧で，台座の高さは 26 cm，横幅は 1 m，厚さは 55 cm であり，その周囲は蓮弁の紋様が施されている。

本碑の台座や碑面上部の供養菩薩は、みな仏教芸術の特徴をそなえている。その由来をもとめれば、「賢覺聖光菩薩」の歴史的伝説に関係があるのである。

伝わるところによると、前漢時代の昭武県（現在の張掖臨沢県）に1人の娘がいた。彼女は幼い時から父母に従って黒河の傍らで暮らしをたてていたが、多くの人々が河水に飲み込まれる様子を見て、人々のために橋をかけることを誓った。10代のころから説いてまわり、資材を工面し、苦勞して寄付を集めること7～8年、最後に3ヶ月をかけて苦しみながら橋をかけた。大橋がまもなく竣工という時に、河水は突如あふれかえり、橋を押し流したが、娘は橋の上に座り込んで離れようとせず、溺れて死んだ。土地の人々は彼女の功德を思い、「仙姑」と呼んで廟を建てて祭った。前漢の武帝の元狩年間に、驃騎將軍霍去病が軍を率いて西方の匈奴に遠征したとき、黒河に遮られた。すると突然1人の緋の衣を着た女が空中に出現し、髪から銀の簪をひとつ抜き落とすと、たちまち黒河の上に1つの大橋が出現し、漢の軍隊は速やかに河を渡ることができたのであった。のちに武帝は仙姑を「平天仙姑」に封じ、その廟は今なお残っている。民国三十一年の高季良・趙毓璦等（編）『創修臨沢県志』輿地志・古蹟・合黎仙跡の条には「仙姑廟、県城東北三十里辺域内、土人云其骸在焉、……合黎山、在廟之北、農人掘出勅封平天仙姑鉄碑。……武帝命驃騎霍將軍征討、師回、為黒河所阻、渾邪王率精兵万騎、欲図掩襲、方惶迫間、見緋衣婦人指揮前導、由橋過河、及渾邪王至、橋与婦人皆不見、霍將軍方知仙姑菩薩靈祐、遂奏武帝、大其廟」とある。橋をかけたことは大慈大悲の菩薩の功德であるとされたので、石碑に供養菩薩を刻んで讃え、碑座に蓮弁を刻んで石碑を立てているのである。

## 1 研究史と課題

本碑は呉副館長の序文にもあるように、乾祐七(1176)年に立てられて以来、張掖近辺の廟などに伝存してきた。西夏時代の石刻資料は極めて少なく、本碑のほかには甘肅省武威市に現存する漢文・西夏文合璧「重修護国寺感通塔碑」（以下、「護国寺碑」と略す）があるのみである。寧夏回族自治区銀川市郊外の

賀蘭山東麓のいわゆる西夏陵墓群からも墓誌が発見されているが、あまりにも損傷が激しく判読に堪えない。それゆえ本碑は数少ない西夏時代の石刻資料として、主に西夏研究者から注目されてきた。岡崎精郎は、清朝時代の黎士弘『仁恕堂筆記』所収の本碑の録文をもとに、文中に現れる神々がタングート民族信仰の内容を露呈したものと解釈している [岡崎 1956, p. 13]。

しかし、本碑の本格的な研究がなされたのは、1978年にチベット学者の王堯が発表した論文「西夏黒水橋碑考補」が最初である [王堯 1978]。王堯は、1976年に史金波・白濱が採拓した同碑の拓本を利用して、漢文面のみならず、初めてチベット文面をも移録・翻訳し検討を加えた。これにより、本碑が合璧碑であることがあらためて示され、その史的価値は飛躍的に高まった。王堯は、本碑をチベット文石刻の系譜のなかでも、吐蕃時代とモンゴル時代との間を結ぶ貴重な史料として位置づけている。そして、チベット文が用いられた理由を西夏領内のチベット人の存在やチベット仏教の影響によって説明し、漢文面の解釈から西夏の改元問題や官職・地名についても言及している。また、本碑のチベット文字表記を漢語の対音資料として利用し、その言語学的利用に先鞭をつけた。なお、本碑の地名表記が黒河下流域の「額濟納」や「亦集乃」(内モンゴル自治区)の語源を明らかにする有力な手掛かりになることにも初めて言及している。

王堯の論文以降、本碑の西夏研究における利用がようやく本格化した。陳炳応は、西夏皇帝が自ら張掖まで行幸するほどこの地域の治水事業に関心を持っていたこと、漢文面中の山神・水神などの記載から、西夏では仏教以外の多神教信仰をも行なっていたこと、チベット文の表記からエチナの語源がモンゴル語ではなく西夏語かチベット語に由来することを指摘し、あわせて末尾の建立関係者が帯びている官名が西夏の官制を解明するうえで有益な資料となりうる、との展望を示した [陳炳応 1985]。

---

(2) エチナの語源については、近年、陳炳応・盧冬が西夏語に由来するものとし、陳炳応 1985 の説を一部修正している [陳炳応・盧冬 2004, p. 266]。

碑文からうかがえる西夏の信仰については、史金波もタングート人の原始宗教と多神教とが密接に関係しながら、仏教信仰とも共存していたことを論じる[史金波 1988, pp. 221-222]。西夏の文化にチベットの影響があることを論じた張雲は、自然崇拜の背景にチベット仏教と共にチベット土着のボン教が張掖に伝播していたと指摘する[張雲 1989, p. 120]。陳炳応・盧冬は甘肅地域で多神教が行なわれた背景として、道教の影響があったのではないかと指摘する[陳炳応・盧冬 2004, pp. 264-266]。

本碑の内容を西夏におけるチベット仏教の発展と結びつける見方も出ている。西夏にチベット仏教が伝播していたことは仏典や絵画資料をもとに早くから指摘されていたが、甘肅地方で安西榆林窟などの石窟寺院の調査が新たに進むと、その認識はさらに深まった。さらにロシア蔵西夏文仏典目録[Кычанов & Нисидя & Аракава 1999]が刊行されると、仏典の奥書に登場する賢覺帝師が、本碑の漢文面に現れる「賢覺聖光菩薩」と同一人物であると指摘する論考が現れ、モンゴル帝国の帝師制度が西夏時代にも存在していたか否かが議論されている[史金波 2002, pp. 39-40; 聶鴻音 2005, pp. 207, 213; 沈衛榮 2007, pp. 45-46]。

しかしながら、以上の先行研究は、王堯を除けば漢文面かチベット文面のいずれかの部分的な考察にとどまっている。そのうえ、漢文面・チベット文面の詳細な訳註作業はいまだ行なわれていない。

さらに、立石当時西夏の公用語の1つとして既に100年以上使用されていた西夏語の存在も考察の対象から排除してはならない。先行研究において西夏語を視野に入れた考察は、今のところ「額濟納」や「亦集乃」の語源問題や「賢覺聖光菩薩」の問題のみにとどまっている。近年、西夏文字の解読が進む一方で、西夏語文献の一部は写真版などで公刊されつつあり、西夏語を使用した研究の環境は新たな段階に入りつつある。今や、官名や固有名詞を漢語・チベット語・西夏語でそれぞれどう表現するのかを比較し、本碑の作成過程に迫ることも可能になっている。

そこで、本稿では、まず漢文とチベット文の精確な録文・訳註を提示する。つぎに、西夏語をも視野にいれ、西夏時代の張掖における信仰・行政などの状況、そして本碑が作成された背景を検討する。

## 2 漢文面の解説・訳註

### (1) 解説

本文は13行の楷書体で書かれている。罫線は引かれておらず、1行あたりの字数は不揃いである。また現状では第1行の3字目が剥落し、また第2行及び第3行の最下部がセメントのようなもので覆われているため、その部分は判読できない。

漢文面を移録した最も古い文献は、清朝康熙年間に編纂された黎士弘『仁恕堂筆記』[p. 1360]であり、9行目までを移録している。ついで1765年に編纂された『乾隆甘州府志』巻13・芸文上・文鈔「黒河建橋勅」[pp. 1260-1261]は8行目までを移録している。13行目までの全行を移録したものには、清末1909年の葉昌熾『語石』巻1 [p. 22]<sup>(3)</sup>、民国期の張維『隴右金石録』巻4「黒河建橋勅碑」[pp. 16086-16087]がある。現状で判読不可能な箇所も記載されていることから、民国期まではほぼ完全な形で判読できたようである。王堯のほか、陳炳応も1965年に独自に入手した漢文面の拓本をもとに録文を掲載しているが[王堯1978, pp. 51-52; 陳炳応1985, pp. 139-141]、判読不能箇所を独自の解釈で補っている。拓本の写真は既に公刊されているが、不鮮明で判読に堪えない[史金波・白濱・呉峰雲1988, pls. 105-107; 湯曉芳2003, p. 194]。このため本稿においては、現状では判読できない箇所は民国期以前の上記移録も参照し、[ ]で補ったうえで以下に録文を掲載する。なお、漢文面の写真を口絵 [Plate I] に掲げる。

---

(3) 「語石」の録文は、清代～民国期の他の録文に比して空画などをかなり忠実に表現している。



## (2) 録文

13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1  
勅鎮「夷」郡境内黒水河上下所有隠顯一切水土之主山神水神龍神樹神「土」  
地諸神等咸聽朕命昔 賢覺聖光菩薩哀憫此河年年暴漲漂蕩人畜故「以」  
大慈悲興建此橋普令一切往返有情咸免徒涉之患皆霑安濟之福斯誠利  
國便民之大端也朕昔已曾親臨此橋嘉美 賢覺興造之功仍鑒虔懇躬  
祭汝諸神等自是之後水患頓息固知諸神冥歆朕意陰加擁祐之所致也今朕  
載啓精虔幸冀汝等諸多靈神廓慈悲之心恢濟度之德重加神力密運威靈  
庶幾水患永息橋道久長令此諸方有情俱蒙利益佑我邦家則豈惟上契十  
方諸聖之心抑亦可副朕之弘願也諸神鑒之母替朕命  
大夏乾祐七年歲次丙申九月二十五日立石  
主案郭那正成 司吏駱永安  
筆手張世恭書 瀉作使安善惠刊  
小監王延慶  
都大勾當鎮夷郡正兼郡學教授王德昌

## (3) 日本語訳

勅命を發する。鎮夷郡の黒水河のあらゆる見え隠れするすべての水土の主たる山神・水神・龍神・樹神・土地神たちよ、みな私(西夏皇帝李仁孝)の命令を聴け。

かつて賢覺聖光菩薩は、この川が毎年洪水を起こし、人や獸畜を押し流していることに心を傷め、大いなる慈悲の心でこの橋を建設し、あまねく往來するあらゆる生き物を川を渡る苦しみから解放し、みな安心して川を渡れる幸いに

浴させた。この事業はまことに国や人民に便宜を与える大いなる礎である。私は以前自らこの橋を訪れたことがあり、賢覺聖光菩薩の建設の偉業をたたえ、真心のこもった祈りをつくして私自らお前たち諸神靈を祀った。その後にはわかに水の害が収まったのは、諸神靈が陰ながら私の思いを受け、密かに助力を加えたからであることを私はよく知っている。

今私は再び真心を尽くしてつつしみの心を広げる。汝ら幾多の神靈が慈悲の心を大きくし、災難から救う行いを広げ、重ねて大いなる力を加え、密かに神靈が威力を行使することを願う。水害が長くやみ、橋が長く持ちこたえることを願う。この地域の生き物に恵みを与え、わが国を助ければ、どうして全世界の諸聖の心にかなうだけにとどまろうか、私の大いなる願いにもかなうのだ。諸神靈はこのことに鑑み、私の命令を違えないように。

大夏（＝西夏）乾祐丙申七（1176）年九月二十五日にこの碑を立てた。

主案 郭那正成 司吏 駱永安

筆手 張世恭が書いた。写作使 安善恵が刻した。

小監 王延慶

都大勾当鎮夷郡正兼郡学教授 王德昌

#### （４）テキスト註

1.1 [夷]：『仁恕堂筆記』『乾隆甘州府志』『語石』『隴右金石録』はいずれも「夷」につくる。

1.1 [土]：『仁恕堂筆記』『乾隆甘州府志』『語石』『隴右金石録』はいずれも「土」につくる。

1.2 [以]：現状では判読不能。『仁恕堂筆記』『乾隆甘州府志』『語石』『隴右金石録』はいずれも「以」につくる。〔王堯 1978；陳炳応 1985〕は判読できなかったために、「發」字を補う。

1.9 乾祐七年：『語石』は２字目を判読できず空画としている。

L.10 郭那正成：『隴右金石錄』は2字目を読んでいない。『語石』は2字目の存在を認めているが判読できずに空画にし、4字目を移録していない。『乾隆甘肅通志』では、2字目を「那」につくる。

L.10 司吏駱永安：『語石』は移録していない。

L.11 瀉作使安善惠刊：『語石』は移録していない。「瀉」は「寫」の誤記だろう。

L.12 小監：『語石』は1字目を「水」につくり、その直前に判読できないもののもう1字あるとする。原碑には、文字が彫られていた形跡は認められない。管見の限り西夏の官名で「～水監」なるものは確認されていない。

L.13 都大勾當：『語石』は1字目を「内」につくるが、他の録文は「都」とする。原碑は「都」とはっきり読める。

L.13 郡學教授王德昌：『語石』は2字目を判読できずに空画とし、4字目を以降を移録していない。

## (5) 語註

L.1 鎮夷郡：張掖の西夏時代の呼び名。『元史』卷60・地理志・甘州の条[p.1450]によると、西夏時代に甘州から鎮夷郡に、後に宣化府に改称されたという。鎮夷の地名はカラホト(黒水城)出土の西夏時代の漢文文献に見られる[佐藤 2006a, pp. 67-68, 70, 72]。一方、西夏語文献には、「鎮夷」に相当する地名を記したものは残っていない。

L.1 黒水河：現在の黒河(エチナ河)を指すのであろう。黒河は祁連山脈を水源として張掖市内を南北に貫流し、内モンゴル自治区エチナ旗のソゴ=ノール、ガシュン=ノールに注ぐ。「黒水」に対応する西夏語は<sup>(4)</sup>𐰽𐰺 zyIr(「水」の意。『夏漢』no. 3058 参照)、𐰽𐰺 nya(「黒い」の意。『夏漢』no. 0176 参照)であり、現在のエチナという地名の語源とされている。ところで、黒河を「黒水河」と表現す

---

(4) 西夏語の推定音表記は、[荒川 1997; 荒川 1999]に従う。なお、本稿では声調を表す冒頭の1(平声)、2(上声)の記号を省略した。

ることは、管見の限り他の時代の文献に見られず、黒河あるいは弱水などと表記される。西夏時代の文献では「黒水」と記されているものは多数あるが、それは下流のエチナ地域を指す、あくまでも地域名であり、川の名称として使われることはない。西夏時代には地域名と区別するために川の名前を「黒水河」と称したのであろう。

1.2 賢覺聖光菩薩：西夏史研究者は「賢覺聖光菩薩」を、12世紀後半以降に刊行されたいくつかの西夏語仏典の奥書に現れる西夏時代の賢覺帝師（西夏文では𐽀𐽂𐽄𐽆𐽎𐽐𐽈𐽊𐽌𐽒𐽔𐽖𐽘𐽚𐽜𐽞𐽟𐽡𐽣𐽥𐽦𐽧𐽨𐽩𐽪𐽫𐽬𐽭𐽮𐽯𐽰𐽱𐽲𐽳𐽴𐽵𐽶𐽷𐽸𐽹𐽺𐽻𐽼𐽽𐽾𐽿𐽰𐽱𐽲𐽳𐽴𐽵𐽶𐽷𐽸𐽹𐽺𐽻𐽼𐽽𐽾𐽿𐽰𐽱𐽲𐽳𐽴𐽵𐽶𐽷𐽸𐽹𐽺𐽻𐽼𐽽𐽾𐽿）と同一人物と考えている[史金波 2002, pp. 39-40；聶鴻音 2005, pp. 207, 213].

一方、張掖の地方志には、呉正科副館長の序文で取り上げられた以外にも、『賢覺聖光菩薩』に関する伝説がいくつか残されている。まず『乾隆甘州府志』巻11・人物・仙釈・張掖県の条[pp. 1155-1156]では、「賢覺聖光菩薩」が、黒河に橋が架かることを願って入水した漢代の「仙姑」なる人物のことで、西夏の皇帝が彼女に「賢覺聖光菩薩」の号を授与したとある。ただし、その出典は明記されておらず、『乾隆甘州府志』編纂当時の伝承に基づいているものとみられる。また同書巻4・名勝[pp. 459-460]では、時代は不明だが、「賢聖聖覺菩薩」が張掖北方の板橋（張掖市臨沢県板橋鎮）に夜月板橋なる橋を建設したという。

この「賢覺聖光菩薩」が漢代の人物なのか、西夏時代の人物なのか、そもそも  
実在の人物なのか、現時点で結論を出すための十分な史料はない。佐藤貴保は  
2006年9月13日に、坂尻・赤木とは別の調査隊の一員として張掖市臨沢県板  
橋郷柳樹堡の香古寺という禅寺を訪ねたところ、堂内に本碑の文章を簡体字で  
彫った2002年立石の石碑が建てられていた。

1.3 安濟：「濟」は「川を渡る」の意。

1.5 冥：かくれる。4字後の「陰」と対になっているのであろう。

1.6 載：ここでは「再」の音通と解釈した。

1.6 濟度：「度」は「渡」に通ずる。災厄を取り除くことを助ける、衆生を救済する、苦難を乗り越えるの意であるが、ここでは黒河を渡ることの困難を緩和することを指している。

1.6 廓：5字後の「恢」と対になっている。「廓」「恢」ともに「広い」「広くする」の意。

1.9 乾祐七年歳次丙申：長部和雄は、当時新出であったカラホト出土仏典の奥書に書かれた紀年の干支にいち早く着目し、乾祐元年が南宋の乾道六年と同じ年、すなわち西暦 1170 年であることを明らかにした[長部 1933, p. 57]。これに従えば、乾祐七年は西暦 1176 年となる。『東方年表』[藤島達朗・野上俊静(編), 平楽寺書店, 2004, 第 35 刷]は乾祐元年を西暦 1171 年としているが、誤り。また『宋史』巻 486・夏国伝下[p. 14026]は、南宋の乾道四(1168)年に西夏で乾祐への改元が行なわれたとするが、これも誤りということになる。

1.10 主案：職名とみられるが、他の西夏の文献に用例を見ない。モンゴル帝国(元朝)では胥吏見習いで司吏より低い身分の者を主案という[牧野 1979, pp. 23-26]。詳細は後述するが、12 世紀末に刊行された西夏語—漢語対訳用語集『番漢合時掌中珠』に現れる中央・地方官衙の属官「都案」のことか。

1.10 郭那正成：「郭那」はタングート人の姓。西夏時代に編纂された西夏文『三才雑字』や漢文で書かれた『漢文雑字』(Дх. 2822)には、西夏のタングート人や漢人の姓を集めた条があるが、そこでは「郭那」なる姓は収録されていない。しかし、12 世紀に刊行された西夏語の字書兼韻書『文海』には、

𐰽𐰚は族姓 𐰽𐰚𐰚のことを言う。[『文海研究』57. 132, pp. 240, 479, 611]

とあり、部族名・姓名として 𐰽𐰚𐰚なる名称が存在していた。𐰽 の推定音は kwo で、漢人姓「郭」を西夏語で表記する際に使用されている[『夏漢』no. 1034]。𐰚𐰚は「黒い」の意で使われることが多いが推定音は nya: であり[『夏漢』no. 0176]、漢語の「那」の発音と近似している。

L10 司吏：西夏の中央・地方の官衙における最下位の属官。『漢文雜字』「司分部第十八」には、朝廷を筆頭に、正庁→承旨→都案→案頭→司吏の順位で、職名が上位から下位へ列挙されている。『俄黒』6, pp. 145-146].

<sup>(5)</sup>  
I. 13 都大勾當：「護国寺碑」では、漢文面で「都大勾當」と書かれている部分を、西夏文面では𐽀𐽁𐽂𐽃𐽄𐽅𐽆𐽇𐽋𐽍𐽎𐽏𐽐𐽈𐽉𐽊𐽌𐽑𐽒𐽓𐽔𐽕𐽖𐽗𐽘𐽙𐽚𐽛𐽜𐽝𐽞𐽟𐽠𐽡𐽢𐽣𐽤𐽥𐽦𐽧𐽨𐽩𐽪𐽫𐽬𐽭𐽮𐽯𐽰𐽱𐽲𐽳𐽴𐽵𐽶𐽷𐽸𐽹𐽺𐽻𐽼𐽽𐽾𐽿𐽰𐽱𐽲𐽳𐽴𐽵𐽶𐽷𐽸𐽹𐽺𐽻𐽼𐽽𐽾𐽿（直訳すると「都案頭監」）と表記している。12世紀中ごろに刊行された西夏の法典『天盛改旧新定禁令』（以下、『天盛禁令』と略す）巻10には各官庁の職名と定員が定められているが、該当する職名は存在しない。特定の職名を指すのではなく、臨時に行なわれる事業の最高責任者という意味合いか。

1.13 郡正：「正」は西夏の中央・地方官衙の長官の称号として多用される。よって「鎮夷郡正」は鎮夷郡の最高位の官人を指すと理解できる。

7.13 郡學教授：西夏の都のあった興慶府(のちの中興府、現在の寧夏回族自治区銀川市)に漢学、番学、国学などの教育機関が存在していたことは、『宋史』夏国伝などによって知られている。しかしながら、本碑の所在地のような地方に教育機関があったことは他に知られていない。

### 3 チベット文面の解説・訳註

(1) 解説

チベット文面に関する最古の記録は、1765 年に編纂された『乾隆甘州府志』巻 16・雜纂 [p. 1854] で、ここには碑陰に「国書」を用いており、その字形は「高昌書」(アラビア文字) に似ていると言及するにとどまっている。ここにいる「国書」とは西夏文字を指すと思われるが、その存在が初めて確認されるのは、居庸関石刻の研究が着手される清末の 19 世紀末になってからである。つぎに、張掖に赴任していた葉昌熾はその著書『語石』巻 1 [p. 22] (1909 年) の中で、碑陰には「番字」が書かれているとしたが、移録はしていない。民国期

(5) 漢文面の録文は[西田 1964, pp. 158-160], 西夏文面の録文は[西田 1964, pp. 161-176] 参照。

(1938 年)に編纂された『隴右金石録』巻4「黒河建橋勅碑」[pp. 16086-16087]には、撰者の張維自ら拓本の採取を試みたところ、不鮮明で判読できなかったが、横書きであることから「唐古忸文<sup>(6)</sup>(チベット文)」であるとする。しかし、やはり移録はない。20 世紀に入って現地を踏査した向達は、張掖市内で本碑を実見し、碑陰に西番字が書かれていることを報告している[向達 1957, p. 343]。このように従来の研究ではチベット文面に言及したものは少なく、またそこに刻された文字についても誤解があった。本テキストを初めて学界に公表したのは王堯である[王堯 1978, pp. 52-55]。彼はこれが楷書体(有頭字 dbu-can)で書かれたチベット文であるとし、テキストの転写と訳文を付すとともに、チベット文に残された漢語字音・西夏音韻についても言及した。ただし王堯以降はチベット文を再読・再考したものはなく、また彼のテキストから研究を進めたもの<sup>(7)</sup>もならず、現在のところこれが唯一の専論といってよい。

## (2) 形態・テキストの特徴

原碑・拓本 [Plate II] によれば、チベット文は全 21 行、文字(基字)の大きさは約 1.5 cm 四方である。本碑は上部から中央にかけて、そして右下部分においては表面の摩滅が著しく、文字の判読が困難となっている。とりわけ 3～8 行目の中央、13～15 行目の末尾は原碑を観察しても文字の痕跡はほとんど残っていない。また 9～10 行目の中央部分は、数 cm ほど碑石の表面が剥落している。

王堯は、チベット文は漢文から訳出したという前提のもとに、摩滅によるチベット文面の欠損部分を漢文面の内容から大胆に推定復元している。しかし、

---

(6) 原文は「其文横列，實唐古忸文也。蓋其時河西多為吐蕃遺族，此碑所紀。又歸功仏教。故以唐古忸文與漢文並列」とある[『隴右金石録』巻4, p. 16087]。

(7) この王堯 1978 年論文は後に王堯「西夏黒水橋碑考補」白濱(編)『西夏史論文集』銀川、寧夏人民出版社, 1984, pp. 463-472; 王堯「西夏黒水橋藏文碑考補」『西藏文史考信集』北京、中国蔵学出版社, 1994, pp. 100-117 に再録された。しかし、前者ではチベット文面に關する部分は省略されている。また後者では、再録にあたって、チベット文のテキストに重大な誤字・脱字が生じている。

碑石を計測すると、欠損部分には王堯の推定復元よりもさらに多くの文字数が入ることは明らかである。また王堯のテキストでは、文節区切り shad や文中の空画、さらには 18～21 行目の冒頭の文字下げが省略されて、全て追込み形式で書かれている。そのため、王堯テキストでは、本来の形態に関する情報が損なわれていることに留意すべきである。

既に王堯が指摘しているように、逆向き表記の母音 -i (gi gu log) (II. 1, 9, 10, 11, 15, 16, 17, 19) や、現代では添足字 -y が消失している単語 myi が見られる (II. 4, 20) など、本テキストは古チベット語としての特徴を残している [王堯 1978, pp. 60-61]。このような表記方法は、9 世紀初頭、吐蕃帝国第 8 代贊普 <sup>ツェンポ</sup> レルパ・チェン Ral-pa cen (Khri gtsug lde btsan) による旧仏教チベット語綴字の改訂 (第二次釐定) を経て改められたとされる [西田 1987, pp. 122-125; 武内 2002, p. 112, n. 50]。しかし 10 世紀の敦煌チベット語文献や 11 世紀西夏時代のカラホト出土チベット語文献にも同様の綴字が残されており、実際には河西地方一帯では 11 世紀後半まで旧来の綴字表記がなおも保存されていた [武内 2002, pp. 116, 113-112 (逆頁), n. 49]。

### (3) テキスト・逐語訳

【凡例】チベット文転写方式は拡張ワイリー方式に準拠し、欠損部分の推定復元には以下の記号を用いた。

- [abc] 残画より確実に復元した文字
- ab[c?] 残画は見えるも読みが確定できない文字
- [\*abc] 摩滅により完全に判読できない文字を推定復元したもの
- [abc/(def)] 複数の読みの可能性があるもの
- [---] 摩滅していて文字の概数も不明
- ab[-] 1 文字あるいは 1 音節分の欠損があるもの

- 1 \$ /:/ om swa [\*sti] / [----- su?] / / gy[a][?] 'ji na [-]u'I stod  
吉祥あれかし。 ……に ? エチナ…の上
- 2 [-----] gnas pa'i / [-----] 'i lha dang / [k]lu['i] lha dang / shing [sa] lha la sogs  
……住んでいる, ……の神 と, 龍の神 と, 樹木・大地神など



- 3 pa [---b?-----/] / [\*bdag] gi bka' nyon cig / sngon 'phags pa byang chub sems  
 ..... 朕 の勅命を聞け。かつて 賢 覺 菩 薩
- 4 [\*dpa' ---] 'od zer gyis / [---]yi[-----]u chu brug chen po [---] / myi [---] mang po la gnod  
 ..... 光明 が, ? ..... 河が大氾濫し ..... 人…の多くに被害を与え
- 5 [---] [']bhangs byabs [-----/?] s[-]o[-----k?]y[-----]y[-----]  
 ..... 万民を取り除き……
- 6 [-----y]es b[---] g[-----] / rgyal khan[-] gyi [---g?]  
 ..... ? ..... の ……
- 7 [-----] dang / bde brgya cha [-----] / / [bdag] sngon 'phags pa bya[ng] chub sems  
 ..... と, 百 福 ? ..... 朕はかつて 賢 覺 菩 薩
- 8 d[pa' b?--- 'od] zer [-----]u[-----] zam [pa] de mthong bas / dad ba dang [---]y[---] nas /  
 ..... 光明 ..... (の作った?) その橋を見たことにより, 信心 と ..... から
- 9 de la [g]nas pa 'I lha klu khyed rnams [---] gyi [---]m rgya chen p[o] [---] / de [---] khyed rnams kyis  
 そこに住んでいる神龍たる汝ら ..... の ..... を 大いに ..... その ..... 汝 ら が
- 10 chu 'I gnod pa mtha' dag zhī bar byas [\*--- / bda]g gi bsam pa dang mthun par byung bas [---] yang shin du  
 水 害 の一切を 鎮 め ..... 私 の 思いと一致したことにより…またとても
- 11 [-]i[---]gs so / / da dung [\*sngar b]zhin [\*du-----] gang gnas pa 'I lha klu khyed rnams [---y---s-] dang  
 …であった。今また 昔の如く ..... 住まう 神龍たる汝ら ..... と
- 12 [-----] / chu [-----] skya]bs kyis / 'gro ba mang pos [-----o-----]  
 ..... 水 ..... 保護によって, 衆生の多くが……
- 13 [-----] dag b[r]tan nas zh[i] ba[r] mdzod cig / [z]am pa lam [-----]  
 ..... などをとこしえにしてから鎮められよ。 橋 ・ 道……
- 14 [-----/?-----] ba mang po la phan par bsgrub pa dang / / bdag gi [-----]  
 ..... の多く へ利益をかなえるならば, 朕 の ……
- 15 [lha? -----] yul [du?-] [bzh]ugs pa 'I 'phags pa rnams kyī thugs dg[-----]  
 神 ..... 国 に? お住まいになる 聖 賢 たち の 御心……

- 16 ['d[un?] [---r]gya chen po bsgrub pa'I stong grogs byas pa yin no / [-----]  
望み …… 大きく 成 就 の 手助けとなるのである。……
- 17 la gang gnas [pa'I lha klu khyed rnam / / bdag gi bka' bzhin du sgrubs shi[g] /  
に 住 ま う 神 龍たる汝らよ, 朕 の 勅 どおりに成し遂げよ。
- 18 / / me pho spre'u lo zla wa rgu pa ni shu lnga nyi ma la rdo yig bslangs /  
ひのえ サル年 九 月 二 十 五 日 に石の文字を立てた。
- 19 / / spyi'I zhal snga ba cin yi kbyin tse g.yo ti cho / / si'u kyam g.yo yan [--- /]  
都 駕 前 鎮夷 郡 正 王 德昌 小 監 王 延 慶 ?
- 20 / / yi ge brko myi zhi' dgan zhan hyi / / yi ge 'bri myi klog sphyi [i ---o---] /  
文字の彫刻使 安 善 惠 文字の書写人 駱 永 安 ?
- 21 / / a lu gu do [tshe(/je)] she / yig mkhan lca'u si dkan /  
都案郭 那 正 成 清書人 張 世 恭

#### (4) テキスト註・語註

**1.1 gy[a]l[-] 'ji l na [-]u'I :** 'ji l na は黒河 (エチナ河) を指すと思われる。gy[a]l[-] は不明。王堯は 'ji na'i を西夏語 zyIr nya: [本稿 pp. 10-11 参照] の音写である可能性を示している [王堯 1978, p. 61]。この点については後述する。なお、漢文面と対応させるなら、最後の [-]u には Tib. chu「水、河」があった可能性が高いが、原碑を見てもわずかな残画からはそこまで読むことはできない。

**1.2 [k]lu[i] lha dang / shing [sa] lha :** 漢文面の「龍神・樹神・土地神」に対応する。王堯は [klu btsan] lha dang [yul] lha と推定復元するが、1 単語目 [k]lu[i] の -lu- や shing は明瞭に読み取れる。また、文字の大きさから考えて、王堯の推定するような btsan や yul が入る余地は無い。

**1.3 [\*bdag] :** 原碑のこの部分はほぼ完全に摩滅しており、gi bka' の直前には、文節区切り shad を除いたほかは全く読めない。しかし、文意からここに 1 人称 bdag が入ることは明らか。また、bdag の直前には shad に挟まれた 3 ～ 4 文字分の空画が置かれることは、本テキスト 7, 14, 17 行目にも確認できる。

II. 3-4 'phags pa byang chub sems [dpa' ---] 'od zer : 漢文面「賢覺聖光菩薩」に対応する。ただし、チベット文では 'phags pa byang chub sems dpa' 「賢覺菩薩」の後に 'od zer 「光明」とあり、漢文面とは語順が異なっている。'od zer は、この「賢覺菩薩」の人名要素を表すものと思われる。王堯は [dpa'] 'od zer と連続して読むが、実見では [dpa'] と 'od zer の間には4文字ほどの空白があり、かすかに文字の痕跡が認められる。

I. 4 la gnod : 王堯は於格助辞 la を読んでいない。

II. 5-6 : 5～6行目は摩滅が著しく、行の大半は判読できない。王堯は5行目に rgyugs, 6行目に su, byams, kyi などいくつかの単語を判読しているが、原碑および拓本を観察しても、そのような文字の痕跡は認められない。

I. 7 bde brgya cha : brgya cha は解釈困難である。王堯は bde ba[r] 'gyu[r] cha [yongs] 「平安成遍」と読むが、原碑を見る限りそのようには読めなかった。brgya cha は字義通りならば直後に数詞を伴って分数「百分の～」を意味するも、内容的にそぐわない。ここでは、漢文面「安濟之福」に対応すると考え、逐語的に bde brgya を「百福」と訳した。

I. 7 / / [bdag] : 王堯は全く読んでいないが、shad の直後には bdag の残画が認められる。

II. 7-8 'phags pa bya[ng] chub sems d[pa' b?--- 'od] zer : 王堯は 'phags pa 以外を全く別様に読むが、実見した結果、字句・字並び共に II. 3-4 とほぼ同じであることを確認した。

I. 8 dad ba dang [---]y[---] nas : 王堯は dad ba dang [bcas nas] と連続して読むが、実際には dang と nas の間は9文字分ほど開いている。

I. 9 lha klu khyed rnams : 2行目に見える龍神や樹木・大地神などの総称。同じ表現は11, 17行目にもあり、漢文面5行目「汝諸神等」、6行目「汝等諸多靈神」、8行目「諸神」とそれぞれ対応している。

I. 9 gyi [---]m : 王堯は g[tor] と復元する。

**l. 9 de [---] khyed rnams** : 王堯は bu khyed rnams と読むが、実見の限り bu は確認できない。

**l. 10 [\*--- / bda]g** : 語末の -g しか確認できないが、文意から 1 人称 bdag があることは確実。また ll. 7, 14, 17 の例から、bdag の直前には shad で挟まれた空画があることが推測される。

**l. 11 rnams [---] dang** : 王堯は rnams の直後に於格助辞 la があるとするが、原碑および拓本では既に摩滅して確認できない。

**l. 12** : 王堯は行の前半部分を [snying rje dang byams pa'i thugs kyis] skyabs kyis と推定復元するが、この欠損部分にはわずかに文節区切り shad と chu 「水、河」が読めるほか、その前後に数文字分の残画が認められるのみである。

**l. 13** : 王堯は zam pa lam の直後に bcas yun du 「～などが永遠に」があるとするが、摩滅により全く確認できない。

**l. 15 [lha? -----] yul [du?-]** : 王堯はこの 3 単語を判読しておらず推定復元するのみだが、原碑を調査したところ、yul は確認できた。

**l. 15 thugs dg[---]** : 王堯は dg[---] を dgye[s] と読み「心喜」と訳すが、添足字の -y は確認できない。あるいはこの dg は複数形を表す dag の可能性もある。

**l. 16 [']d[un?]** : 王堯はこの語を推定復元するにとどめているが、基字 d は明瞭に見て取れる。

**l. 18 me pho spre'u lo zla wa rgu pa ni shu lnga nyi ma la** : ここでは西夏の元号「乾祐」の音写ではなく、干支のみで年を表している。また月は「zla + 序数詞」、日にちは「数詞 + nyi ma」という表記が特徴的である。特に nyi ma は一般に「日、太陽」を指すが、チベットの暦法における日付表記には通常 tshes を用い、nyi ma を使用することはまずない。また、数詞は必ず tshes より後に置かれる。たとえば、吐蕃時代の古い例としては、822 年建立の『唐蕃会盟碑』(l. 63) には、chu pho stag gI lo'i dbyar sla brIing po tshes drug la 「みずのえトラの年の仲夏の月 (= 五月)、九日に」とあり [Li & Coblin 1987, pp. 51, 99; 『吐蕃金石録』pp. 37, 43], また後代の 13 世紀のチベット語文献においても stag lo zla ba bdun pa'i tshes

gcig la「トラ年第七月の一日に」とある [Tucci 1949, pp. 747-748; 中村 2002, p. 73]. これらと比較すると、本碑における月の表記は後代モンゴル時代のものと同じであり、いっぽう日付表記は、吐蕃時代・モンゴル時代のいずれとも異なっている。なお、西夏語では日付は 𐽀𐽁𐽂𐽃𐽄𐽅 正月十五日 [「護国寺碑西夏文面」, cf. 西田 1964, p. 167] のように表現する。「日」に相当する 𐽀𐽁 は、「日」と「太陽」とのいずれを表す場合にも用いられる [『夏漢』no. 2440].

II. 19-21: 漢文面の 10 ~ 13 行目に対応。ただし名前の序列は漢文面のそれとは全く異なっている。この配列については後述する。

1) spyi'l zhal snga ba cin yi bkyin tse g.yo ti cho : cin yi bkyin tse g.yo ti cho < Chin. 鎮夷郡正王德昌. spyi「全て」は漢語「都」と同義。また zhal snga は「御前・駕前」を指すが、漢文面の「大勾當」に相当する意味は無い。

2) si'u kyam g.yo yan [---] : < Chin. 小監王延慶. 王堯は最後の語を kin と復元しているが、この箇所は完全に摩滅しており全く読めない。

3) yi ge brko myi zhi' dgan zhan hyi : dgan zhan hyi < Chin. 安善惠. 王堯は「安」を dga' と読むが、明らかに読み誤りで dgan と読める。yi ge brko myi zhi' で漢文面の「瀉作使」に相当。yi ge brko myi はチベット語で「文字を彫る人」を意味し、zhi' は漢語「使」の音写と考えられる。

4) yi ge 'bri myi klog sphy[i] [---]o[---] : 王堯は人名を klog [spyi] dgan と読んで、これを漢文面 10 行目の駱永安にあてているが、末尾の語は [---]o[---] であり、永安の中古音 (jɿwəŋ -ân)・中原音 (iəŋ / iəŋan)・河西音 (後述) (jɿwäi ʔān) のいずれとも一致しない。このため、sphy[i] [---]o[---] が漢語「永安」の音写とは考えにくく、西夏語もしくはチベット語人名の音写かもしれない。

5) a lu gu do [tshe(je)] she : 王堯は a lu gu je nye と読むも、その意を不明としている。漢文面とチベット文面の末尾に現れる立石関係者を比べれば、これが漢文面の「主案郭那正成」に対応するのは確実。なお、a lu を漢文面に見える「主案」でなく「都案」と訳すことについては後述する。

6) yig mkhan lca'u si dkan : lca'u si dkan < Chin. 張世恭。

黒水橋碑	韻攝	敦煌文献の対音例	中古音	中原音	河西音
鎮 cin	臻攝	cin	ʈiēn	tɕiən	tɕiən
夷 yi	止攝	—	i	i	—
郡 bkyin	臻攝	gwin	gʲiuan	kiuən	kiwən
正 tse	梗攝	ceng	tɕiǎŋ	tɕiəŋ	tɕiä
王 g.yo	宕攝	wang / ngo	ʝiwang	uaŋ	ʝiwo
德 ti	曾攝	tig	tək	tei	tək
昌 cho	宕攝	'chang	tɕʰiǎŋ	tɕʰiəŋ	tɕʰiə
小 si'u	效攝	s'eu / z'eu	sǐäu	siau	siäu
監 kyam	咸攝	kam	kam	kiam	—
王 g.yo	宕攝	wang / ngo	ʝiwang	uaŋ	ʝiwo
延 yan	山攝	yan / yen	ʝän	ian	ʝiän
慶 [---]	梗攝	keng / kheng	kʰǎŋ	kʰiəŋ	kʰiäi
使 zhi'	止攝	she / shi / shi'	ʃi	ʃi	ʃi
安 dgan	山攝	an / 'an	·än	an	ʔän
善 zhan	山攝	shan / zhan / zhag	ʃän	ʃien	ʃiän
惠 hyi	蟹攝	hywe	ʝiwei	hui	xiwäi
駱 klog	宕攝	—	lâk	luo / lau	—
永 sphyl[i]	梗攝	weng, we, wen, 'u	ʝiwɔŋ	iuŋ / iuəŋ	ʝiwoi
安 [---]o[---]	山攝	an / 'an	·än	an	ʔän
張 lca'u	宕攝	cang / chang	ʈiǎŋ	tɕiəŋ	—
世 si	蟹攝	she'i / she / zhe	ʃäi	ʃi	ʃiäi
恭 dkan	通攝	kung	kung	kuŋ	kiuŋ
郭 gu	宕攝	kwag	kwâk	kau	kwoak
那 do	果攝	'da	nâ	nuo	n'dâ
正 tshe / je	梗攝	ceng	tɕiǎŋ	tɕiəŋ	tɕiä
成 she	梗攝	sheng / shing	ʃiǎŋ	tɕiəŋ	ʃiä

【参考】敦煌文献の対音例＝武内 1986, pp. 585-586；高田 1988；Uray 1988, pp. 521-522；高田 1991, p. 261；坂尻 2002, pp. 69-71／中古音＝GSR／中原音＝『漢字古今音表』／河西音＝高田 1988。

王堯は、本碑のチベット文面が漢文面から訳されたことを前提に、チベット文面にあらわれる対音例の特徴を検討している [王堯 1978, pp. 59-60]。まず、鼻音韻尾 (-ng) が欠落している例として「王 g.yo」と「昌 cho」とをあげ、西夏語における鼻音韻尾の不在に関連づけている。また、「小 si'u」, 「監 kyam」, 「郡 bkyin」の3例を中古音や羅常培が提唱した唐五代の「西北方音」と比較し、西夏人が使用した漢字音が唐五代の音に非常に近いと考えている。王堯の見解は、本碑のチベット文面を漢蔵対音資料として初めて使用した結果であり示唆に富むが、全ての対音例を分析した網羅的なものではない。そこで、本碑の全対音例を前頁の表に示し特徴をのべる。なお、表には比較のため、敦煌文献中のチベット文字による対音例・中古音・中原音・河西音(河西方言)も表示している。このうち河西音は9～10世紀頃の河西地方で使用された漢字音であり、同時期・同地域の漢字音を包括的に研究した高田時雄が提示したものである [高田 1988]。また駱永安 klog sphy[i] [---]o[---] は前述のごとく、漢人ではない可能性もあるが、比較参考のために表に加えた。

この表を見るかぎり、本碑のチベット文面にあらわれる対音例は、河西音の系統に属し、その一方でより新しい要素も含んでいる。河西音と本碑の例とは、年代にも200年余の差があり、当然のことながらいくつかの相違点はある。例えば「世 si」は河西音の対音例「世 she'i, she, zhe」と比べると明らかに子音が異なっている。しかし、河西音の大きな特徴は、宕摂と梗摂との鼻音韻尾 (-ng) が脱落することである [高田 1988, pp. 161-163, 169-172, 179]。そして、本碑においても宕摂の「王 g.yo」, 「昌 cho」, 「張 lca'u」や梗摂の「正 tse / tshe (je?)」, 「永 sphyi」, 「成 she」は全て鼻音韻尾 (-ng) を持たない。また、10世紀の河西音では、人名要素として用いられる際の「王」や「張」は、それぞれ、「wang」や「cang」と写されて、宕摂であっても古い特徴をとどめて鼻音韻尾は落ちていない [高田 1991, pp. 265-266]。これに対し本碑では、「王」と「張」との鼻音韻尾はすでに失われており、10世紀の河西音よりも変化が進んでいるとい

える。ただ、通撰の「恭(中古音 *kung*)」の場合は、河西音の対音例「恭 *kung*」のように鼻音韻尾(-ng)を残すことが期待される。しかし、本碑では「恭 *dkan*」となって、-n 音が残る母音も異なる。このように全ての鼻音韻尾の例が河西音の特徴と完全に一致する訳ではない。なお、鼻音声母の脱鼻音化も河西音の特徴であるが[高田 1988, pp. 88-91]、本碑でも「那 *do*」にその例がみえる。

より新しい要素としては、入声音の消失をあげることができる。入声音の消失は河西音には例外的にしか現れない[高田 1988, pp. 164, 167]。一方、本碑の例では中古音や河西音の段階で入声音を保持していた「徳」、「駱」、「郭」のうち、「徳 *ti*」や「郭 *gu*」では入声音が脱落している。「駱 *klog*」の入声音は残っているものの、その変化が進行していることがうかがえる。また、牙音 2 等の「監 *kyam*」には、10 世紀の対音例「監 *kam*」と比べると、拗音介母の -y- が発生しており拗音化していることがわかる。牙・喉音 2 等の拗音化は、河西音やソグド文字による対音例にも先駆的に現れているが、なお不完全なものであったとされる[高田 1988, p. 121; 吉田 1994, pp. 342-341(逆頁)]。ここに見える「監 *kyam*」の例は、河西音の段階から拗音化が進行した結果であり、新しい特徴のひとつといえる。

#### 4 西夏時代の張掖

以上、漢文面およびチベット文面のテキストを比較すれば、表現や形式の違いはあるものの、2つのテキストにはほぼ同じ内容が書かれており、両面の末尾にあらわれる立石に関わった者も同じ人物である。本碑は西夏皇帝李仁孝が黒河流域の神霊たちに対し、治水と橋の保全を命ずる勅令の形をとっている。李仁孝は、賢覺聖光菩薩が黒河に架橋した業績を称え、自らが行なった以前の祭祀に諸神霊が感応したことを喜び、今回も諸神霊が祭祀を受けて助力するよう求めている。碑文の内容をみるかぎり、本碑はこうした李仁孝の祭祀を記念する目的で立てられたと考えられる。



黒水橋碑の内容から直接得られる情報は、それほど多い訳ではない。しかし、このような碑文が、その時、そこに立てられたこと自体が、西夏時代の張掖がどのような場所であったのかを示している。以下に関連する史料で補いつつ考察を加える。

## (1) 時代背景

西夏皇帝李仁孝(仁宗: 在位 1139 ~ 1194 年)は即位以来、長らく外戚の任得敬による専横により、国政の実権を完全に掌握することができずにいたが、1170 年に任得敬を殺害して以降は親政を行なった。彼の治世において、儒教・仏教の振興策が実施されていたことは先学によって指摘されている<sup>(8)</sup>。カラホトや敦煌などでこれまでに発見された文献(仏典や中国古典の西夏語訳、用語集、韻書など)の刊行年代を分析すると、1180 年代後半以降のものが比較的多い。想像の域を出ないが、張掖付近の黒河の神霊を祀る本碑も、こうした文化政策の一環として建てられたのかもしれない。

## (2) 信仰・祭祀

タングート人が聖賢(先祖の神)・地神・天神・大神を信仰していたことは先行研究でも指摘されているが[西田 1997a, p. 427], 本碑ではそれ以外の様々な神霊が呼びかけの対象として現れている。漢文面の冒頭では「山神・水神・龍神・樹神・[土]地諸神等」と、総称として 5 行目「汝諸神等」・6 行目「汝等諸多靈神」・8 行目「諸神」と呼ばれる。また、チベット文面にも 2 行目に [...]i lha dang / [k]lu[i] lha dang / shing [sa] lha la sogs「…の神と、龍の神と、樹木・大地神など」とあり、総称では 9 行目・11 行目・17 行目 lha klu khyed rnamsl「神龍たる汝ら」とある。これらの神霊については、前述のように自然崇拝や多神教を示す

---

(8) 李仁孝の儒教・仏教振興策については、[中嶋 1936=1988, pp. 413-416; 松澤 1986; 西田 1997b, pp. 452-455; 向本 2006, pp. 121-129]などの論考がある。

ものとして先行研究では取り上げられているが、いずれも推測の域を出ず、それぞれの神霊の詳細は不明である。

ただ、碑文が立てられた9月は、西夏時代には「神有月」とでもいうべき神聖な月とされている。西夏の百科全書であるカラホト出土西夏文『聖立義海』巻1「九月の名前・意味」には、

九月は戌に属する。天王は国を巡検する。皇帝も庶民も良い行いをすれば、高いところの霜や露は損なわれず、柴草の果実が熟す(月)を言うなり。[『聖立』p. 317]

九月十五(日)は、賢しき<sup>さか</sup>聖なるものが集まる日。禪(の境地)が穏やかに生ずる日。皇帝の徳と民の孝に依り、天王に願う。[『聖立』p. 316]

という記述がある。9月は西夏の人々が信仰している「天王」が国内をめぐる時期とされている。また「九月十五日」の「賢しき聖なるもの」が何者が不明であるが、この日が西夏の人々が信仰の対象としているものを祀る時期に当たっていることは察せられる。

また、同書巻2「山の名前・意味」には祁連山脈とみられる西夏領南部辺境の山「神化德山」<sup>(9)</sup>について、

玉体や神が化身し、仏が実際に出現する。人民の福を求める所である。

[『聖立』p. 305]

---

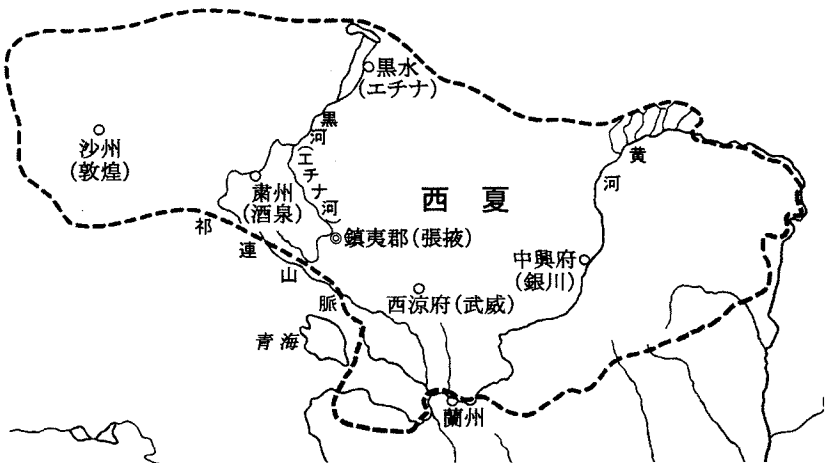
(9) この山の説明は「焉支上山」(甘肅省山丹県の焉支山、ないしはそれを含む張掖付近の祁連山脈)の直後に書かれており、そのあとは「西辺宝山」そして「沙州(敦煌)神山」と続いている。なお『聖立義海』「山の名前・意味」は、銀川西郊の賀蘭山を振り出しに南→西→北→東と、ちょうど平仮名の「の」字を描くような順序で山の名前とその説明が書かれている。

との記述があり、山脈に信仰の対象とするものが存在していることを物語っている。黒河は祁連山脈に源を発するが、本碑中の「黒水河上下」にいとされる様々な神霊のうち、特に「山神」を指しているのかもしれない。

ともあれ、皇帝による神霊への祭祀を記念した黒水橋碑が、神聖な9月に、張掖に立てられている事実は、これらの張掖付近の神霊に対する信仰が公式に認められていることを示している。

### (3) 交通の要衝としての張掖

12世紀後半の西夏は東隣の金朝と西方の諸国(西ウイグル王国、ホラズム朝)との間にあって中継貿易を営んでいた[佐藤 2003; 2006b]。カラホト出土文書の中には、12世紀に「鎮夷住戸」が西涼府(武威)の榷場(官営貿易場)に毛織物などを運び、四川(当時は金朝のさらに南の南宋領)産の絹や茶を買い入れたとみられる漢文文書が発見されており[佐藤 2006a, pp. 67-68, 70, 72], 河西回廊で商業活動が活発に行なわれていたことがわかる。



西夏の勢力範囲 (12 世紀後半)

張掖は、東トルキスタン方面と武威そして西夏の都のあった銀川方面とを結ぶ東西の交通路上にあり、モンゴリアとチベットとを結ぶ南北の交通路の通り道にもあたっていた。このような交通の要衝に架かる橋の保全を西夏皇帝自らが祈念している事実は、西夏の中央政府にとって当該地域の交通路の確保・維持という面で橋の存在が重要であったことを示唆している。

#### (4) 西夏の地方支配・官制と張掖

西夏の都は中興府にあった。『天盛禁令』では、都を含む寧夏平原を「畿内」と表現するのに対し、その他の地域を「辺地」と呼んでいる。西夏にとって張掖は西部辺境の一地方であった。こうした辺境地域の地方統治の方法については、軍政面では『宋史』巻 485・夏国伝上 [pp. 13994-13995] に、建国当初から辺境に監軍司を設置し、有力な豪族たちに地方の軍団を統括させていたことが記されている。一方の民政面は、『天盛禁令』を通じて地方に郡や県、城司といった名称の官衙が置かれていたことがわかる程度である。ただし郡県制が西夏で布かれていたのかどうかは明らかでない。

しかし本碑によって、実際にどのような人員が張掖に配置されていたのかを知ることはできる。漢文面の 10 行目には主案・司吏といった下級属官の名前が 2 名書かれているが、最初的主案という役職を持つ人物の名前は姓が郭那であり、タンゲート人の姓である [本稿 p. 12 参照]。13 行目の 5 字目から始まる鎮夷郡正すなわちこの郡の長官は、姓が王であり、漢人とみられる。皇帝をはじめとする西夏の支配者階級はタンゲート人の出身が多いが、漢人も登用されていたことがわかる。

また、漢文面に書かれている官職名の具体的な職掌は、チベット文面と対照することで明らかにできる場合もある。漢文面の 10 行目の後半に「司吏駱永安」が現れる。駱永安はチベット文面では 20 行目の後半に現れ、肩書きは漢語の「司吏」をそのまま音写するのではなく、*yi ge 'bri myi*「文字の書写人」と表記し

ている。「司吏」を西夏語で表現する場合は「役所で立っている(人)」という意味の2字の西夏文字 𐽀 𐽁 で表現される。それに対して、チベット語の表現は「司吏」の実際の職掌を表しているものとみられる。

このように、立碑に関わった鎮夷郡の人々のうち、明らかにタングート人とわかるのは1名のみであり、長官・次官をはじめ他の5名はタングート人ではない。実際に張掖のような地方都市の経営を支えていたのは、彼らのような非タングート人であったのである。

### (5) 張掖におけるチベット語使用

本碑はチベット語と漢語とのバイリンガル史料である。では、なぜ西夏語ではなくチベット語と漢語とが選ばれたのだろうか。

王堯は、漢語の使用は当然としたうえで、チベット語が使用された理由について、領域内のチベット人を懐柔するための手段であり、チベット仏教の影響があるとも述べている [王堯 1978, pp. 56-57]。史金波も、8世紀後半から9世紀半ばにかけて吐蕃の支配を受けていた張掖地域には、多くのチベット人が居住していたからであろうと論じている [史金波 1988, p. 55]。しかし、12世紀の張掖におけるチベット語使用を考えるうえで、もうひとつ考慮に入れなければならない事項がある。それは、吐蕃の支配が終わった9世紀半ば以後も、張掖を含む河西回廊一帯に広がっていたチベット語使用の伝統である。

実際に、張掖(甘州)では10世紀半ばの段階でもチベット語が共通語として使用され続けていた。当時の張掖を支配した甘州ウイグル(トルコ系)は沙州(敦煌)の帰義軍節度使政權(漢人が中心)やコータン王国(イラン系)とチベット文の書状で連絡を取り合っている<sup>(10)</sup>。また、甘州ウイグルの可汗は、配下の者

---

(10) 甘州ウイグル可汗から帰義軍節度使政權への手紙の原物としては、932～934年に出された P.t. 1082 があり、研究は Uray 1981, p. 88; 山口 1985, pp. 516-518; 森安 2000, pp. 81-85; 石川 2003 を参照。一方、コータン王から甘州に宛てた手紙の下書きに P.t. 2111 pièce A がある。研究は Uray 1981, pp. 84, 88; 武内 1986, p. 591 を参照。

に対しチベット文の告身<sup>(11)</sup>(辞令書)すら発行しており、当時の張掖では明らかにチベット語が公用語としての役割を担っていたのである。

吐蕃支配期以後のチベット語使用について網羅的に検討した武内紹人によれば、こうしたチベット語使用の習慣は張掖を含む河西回廊に定着し、吐蕃時代以来の古チベット語の書式やスタイルは11世紀以降の西夏時代にまで継続していたとされる[武内 2002, pp. 121-117 (逆頁)]. ただし、これはカラホト出土文献にチベット語文献が存在していることに基づく見解である。カラホトは河西回廊からも外れた西夏の辺地であり、それらのチベット語文献のうち仏典は敦煌から持ち込まれたものである可能性も示唆されている[武内 2002, pp. 117, 113, n. 43].

一方、張掖は西夏の中央から外れているものの、河西回廊の幹線に位置する主要なオアシスであり、黒水橋碑はまぎれもなくその地に立てられた碑文である。そして、古チベット語に通じる古い正書法のスタイルを保っている(本稿 15 頁参照)。つまり、本碑は吐蕃時代から続くチベット語使用の伝統が、12 世紀末の張掖で受け継がれていたことを示す動かぬ証拠なのである。

本碑は神霊をも従える皇帝の威徳を誇示する内容を持っており、広く読まれることを期待されている。漢語と並んでチベット語が採用された理由は、張掖ではチベット語が漢語と同じく古い伝統をもち、地域に根付いた言葉であったからであろう。逆に言えば、西夏文字・西夏語はこの時期でも、張掖においては一般的ではなかったのかもしれない。

## 5 碑文テキストの作成過程

王堯は、本碑がまず漢語のテキストから作られ、その後チベット語に翻訳されたと考えている[王堯 1978, pp. 59-60]。しかし、漢文面とチベット文面とで

---

(11) 943 年に甘州ウイグルの金門宮殿から出されている告身の下書き (P.t. 1188 v-2)。

翻訳・解説は Uray 1988, pp. 522-524; 山口 1985, pp. 515-516 を参照。本文書の意義や年代比定については、森安 1980, pp. 65-66; 森安 2000, p. 83 を参照。

は、表現に大きな相違が見られ、漢語から直接チベット語に翻訳されたと理解するにはいささか無理がある。以下にその相違点を列挙し、西夏語での表現とも照らし合わせて、この問題を検討したい。

### (1) 冒頭の表現

漢文面は「勅」で始まるのに対し、チベット文面は om swa [\*sti]「吉祥あれかし」で始まっている。なお、西夏語には「勅」に相当する言葉がある。

### (2) 空画表現

漢文面では2箇所の「賢」字の直前に空画が見られる。チベット文面では西夏皇帝の1人称 bdag の直前に設けられている。西夏時代における西夏語および漢語文献では皇帝や特定の仏教用語に対して空画や改行平出の表現が行なわれ、「賢、御」にあたる西夏語 𐽮 の直前が空画となっている例も『天盛禁令』などに見られる [佐藤 2003, p. 207, n. 4]。

### (3) 末尾の碑建立関係者の序列

建立関係者の帯びている肩書きに注目して、その序列を追っていくと、漢文面とチベット文面とではほぼ対照的な並び方をしている。漢文面では、「主案」で始まり、続いて同じ行に「司吏」と続き、その次々行に「小監」、さらに次行に「鎮夷郡正」と続く。地位の低い属官が先に書かれ、地位の高い長官は最後に現れている。そして、肩書きの書かれる碑文上の位置は後行に進むにつれて高くなっている。

これに対し、チベット文面では最初に cin yi bkyin tse「鎮夷郡正」が現れ、ついで同じ行に si'u kyam「小監」、次行に yi ge 'bri myi「文字の書写人(=司吏)」さらに次行に a lu「都案」と続く。肩書きの書かれる位置は概ね後行に進むにつれて低くなっていく。つまり、概ね地位の高い者から順に書かれていくのである。これが当時のチベット語碑文の一般的な序列に則したものなのか否

か、他の用例が無いために即断はできないが、漢語からチベット語に訳されたのであれば、序列も漢文面と同様にするのが自然であろう。

「護国寺碑」の西夏文面にも、寺内の塔の修復関係者の名前と碑文の建立に係した者の名前が列挙される。その序列は「都案頭監(=都大勾当)三司正」→「都案頭監行宮三司正」→「小頭監行宮三司承旨」と地位の高いものから順に書かれていく。<sup>(12)</sup>すなわち、本碑のチベット文面と同様の序列となっているのである。この序列の傾向は西夏文『天盛禁令』冒頭の編纂者リスト(通称「進律表」)などにも見られる[史金波・白濱・黄振華・聶鴻音 1992]。漢文面では漢文石刻の体裁に則り、チベット文面では西夏文石刻ないしは各種典籍の奥書の体裁に準拠していた可能性がある。

#### (4) 固有名詞の表現

漢文面の10行目前半には、「主案郭那正成」という人物が現れる。管見の限り、「主案」の用例は他の西夏の文献には見られない。この人物はチベット文面では21行目の前半に現れ、肩書きはa lu と表記されているが、チベット語では解せない。漢語「主案」をそのまま音写したとも到底思えない。『天盛禁令』には、西夏語で 'alyu と、かなり近似した発音を持つ 𐽄𐽀𐽂𐽄 という中央・地方官衙の属官の名が現れる。𐽄𐽀𐽂𐽄 は「1つの」の意[『夏漢』no. 5981]、𐽀𐽂𐽄 は「すべて」の意を持つ[『夏漢』no. 0438]。12世紀後半に出版された西夏語—漢語対訳用語集『番漢合時掌中珠』には𐽄𐽀𐽂𐽄 に対応する漢語を「都案」と記し、その職掌を「判憑」と説明する[『俄黑』10, pp. 16, 33]。『漢文雜字』「司分部第十八」には官衙名・職名に関する単語が列挙されている。そこには「都案」という単語が現れるものの、「主案」は見当たらない。漢語の「主」も「都」も、両者の字義は近似している。したがって本碑の「主案」は都案と同じ職名を指している、あるいは

---

(12) 「護国寺碑」の漢文面での序列は「黒水橋碑」の漢文面と同様、地位の低い者から高い者へと並べられている。



誤って主案と表記したのかもしれない。チベット文面の表記 *alu* は、西夏語の都案 *𐽀𐽂* *ʼalyu* をそのまま音写したものに違いない。

[illegible]

とある。𐎃𐎆𐎥𐎥 (御前) には皇帝の面前・至近の意味合いがあり [佐藤 2003, pp. 214-215, n. 1], 「御前注疏校都大勾當」とは皇帝からの指示を直接受けて注疏・校正を指揮する最高責任者を表している。本碑に現れる都大勾当には, 「御前」にあたる語は加えられていないが, 皇帝の勅命を受けて現場で碑の建立を指揮した人物だとすればチベット文面が *spyi' l zhal snga ba* 「都駕前」と表現してもおかしくはない。

以上のように、漢文面とチベット文面とは表現の上で相違点があり、一方から他方へ直接訳されたとは思えない。むしろ、本碑が西夏皇帝の勅令であることを考えれば、2つのテキストは1つの西夏語のテキストをもとにしていると考えerべきであろう。実際、これらの相違点は西夏語を介在させることによつ

て少なからず解決できる。2つのテキストの差は、西夏文から漢文に訳される際には、漢文の表現や様式に強く影響を受けているのに対し、チベット文に訳される際には、もとの西夏文の表現や様式を多く残していることに由来していると考えられる。

## おわりに

本稿では黒水橋碑の実見調査および独自に入手した拓本をもとに、漢文面・チベット文面双方の精確なテキストと訳註を提示した。そして両者を比較しつつ、西夏語での表現をも考慮に入れて、西夏時代の張掖における諸事情を検討した。漢文面とチベット文面はほぼ同じ内容が書かれているにもかかわらず、建立者を列挙した部分の序列や固有名詞の表記の形式などにはズレがある。チベット文面のいくつかの表現は西夏語に由来するものであり、本碑の元テキストが漢語でもなくチベット語でもなく西夏語であった可能性を指摘した。

本碑を通じて、西夏時代における張掖の実情を知ることができる。西夏が甘州ウイグルを滅ぼしてこの地域を支配下に入れたのは1028年ごろとされている[長澤 1963 = 1979, pp. 356-357]。河西回廊中部の張掖は農牧業のみならず東西交通の面でも黒河と交差する要地であった。本碑の存在は、西夏政府がこの地域の治水・交通事情に重大な関心を持っていたことを示している。

また、本碑の建立に関係した鎮夷郡の官人集団は、タングート人や漢人といった出自の異なる人々によって構成されていた。そして西夏の征服以来150年近い歳月が流れているにもかかわらず、この地域ではチベット語が依然として使用されていた形跡が認められる。さらに、西夏皇帝の名のもとに黒河流域の様々な神霊への祭祀が行なわれているという事実は、西夏では仏教・儒教・道教だけでなく在地の多様な信仰が保たれており、政府がそれを公認していたことを雄弁に物語っている。こうした一連の事例は、張掖ひいては西夏王国が様々な民族・言語・文化を持つ人々によって構成された多民族・多言語・多文化的社会であったことを示している。

## 【使用漢籍・略号・文献表】

『宋史』=北京,中華書局。

『元史』=北京,中華書局。

『乾隆甘州府志』=『乾隆甘州府志』《中国方志叢書 華北地方 561》台北,成文出版社。

『語石』=葉昌熾『語石』上海,上海古籍出版社。

『仁恕堂筆記』=黎士弘『仁恕堂筆記』《昭代叢書》上海,上海古籍出版社。

『隴右金石錄』=張維(編)『隴右金石錄』10卷 附校補1卷《『石刻史料新編』地方類 21》台北,新文豐出版公司影印。

GSR=B. Karlgren, *Grammata Serica Recensa*, Stockholm, 1957 (repr. 1964).

『夏漢』=李範文 1997。

『俄黑』=『俄羅斯科学院東方研究所聖彼得堡分所藏黑水城文獻』全11卷,上海,上海古籍出版社,1996-1999。

『漢字古今音表』=李珍華·周長楫(編撰)『漢字古今音表』(修訂本)北京,中華書局,1999。

『聖立』=Кычанов, Е. И., *Море значений, установленных святыми*, Санкт-Петербург, 1997。

『吐蕃金石錄』=王堯(編著)『吐蕃金石錄』北京,文物出版社,1982。

『文海研究』=史金波·白濱·黃振華『文海研究』北京,中国社会科学出版社,1983。

荒川 慎太郎 ARAKAWA Shintaro

1997 「西夏語通韻字典」『言語学研究』16, pp. 1-151.

1999 「夏藏対音資料からみた西夏語の声調」『言語学研究』17/18, pp. 27-44.

陳 炳屹 CHEN Bingying

1985 「黑河建橋勅碑」『西夏文物研究』銀川,寧夏人民出版社, pp. 139-142.

陳 炳屹 CHEN Bingying · 盧 冬 LUO Dong

2004 「黑水河橋勅令碑和多神崇拜」『古代民族』蘭州,敦煌文芸出版社, pp. 263-266.

石川 巖 ISHIKAWA Iwao

2003 「帰義軍期チベット語外交文書 P.T. 1082 について」『内陸アジア史研究』18, pp. 23-37.

Кычанов, Е. И. & Нисидо, Т. & АРАКАВА, С.

1999 *Каталог тангутских буддийских памятников института востоковедения российской академии наук*. Киото.

李 範文 LI Fanwen

1997 『夏漢字典』北京,中国社会科学出版社。

Li Fangkuei & COBLIN, W. S.

1987 *A Study of the Old Tibetan Inscriptuins; Institute of History and Philology Academia Sinica, Special publications No. 91* (『古代西藏碑文研究』(中央研究院歷史語言研究所專刊之九十一)), 台北,中央研究院歷史語言研究所。

牧野 修二 MAKINO Shuji

1979 「元代勾当官の体系的研究」東京、大明堂。

松澤 博 MATSUZAWA Hiroshi

1986 「西夏・仁宗の訳経について —— 甘肅省天梯山石窟出土西夏経を中心として ——」『東洋史苑』26/27, pp. 1-31.

森安 孝夫 MORIYASU Takao

1980 「イスラム化以前の中央アジア史研究の現況について」『史学雑誌』89-10, pp. 50-71.

2000 「河西帰義軍節度使の朱印とその編年」『内陸アジア言語の研究』15, pp. 1-121, +1 table, +15 pls.

向本 健 MUKAIMOTO Ken

2006 「西夏の仏教とその政治的背景」『大谷大学大学院研究紀要』23, pp. 113-135.

長澤 和俊 NAGASAWA Kazutoshi

1963 「西夏の河西進出と東西交通」『東方学』26 (再録:『シルク・ロード史研究』東京、国書刊行会, 1979, pp. 349-378) .

中嶋 敏 NAKAJIMA Satoshi

1936 「西夏に於ける政局の推移と文化」『東方学報 (東京)』6 (再録:『東洋史学論集 —— 宋代研究史とその周辺 ——』東京、汲古書院, 1988, pp. 399-423) .

中村 淳 NAKAMURA Jun

2002 「元代チベット命令文研究序説」『碑刻等史料の総合的分析によるモンゴル帝国・元朝の政治・経済システムの基礎的研究』(平成 12 ~ 13 年度科学研究費補助金基盤研究 (B) (1) 研究成果報告書), pp. 69-85.

聶 鴻音 NIE Hongyin

2005 「西夏帝師考辨」『文史』2005-3, pp. 205-217.

西田 龍雄 NISHIDA Tatsuo

1964-1966 『西夏語の研究: 西夏語の再構成と西夏文字の解説』上下巻, 東京、座右宝刊行会.

1987 「チベット語の変遷と文字」長野泰彦・立川武蔵(編)『北村甫教授退官記念論文集 チベットの言語と文化』東京、冬樹社, 1987, pp. 108-169.

1997a 「西夏の仏教について」『西夏王国の言語と文化』東京、岩波書店, pp. 403-438.

1997b 「西夏語仏典について」『西夏王国の言語と文化』東京、岩波書店, pp. 439-469.

岡崎 精郎 OKAZAKI Seiro

1956 「西夏の民族信仰について」『古代学』5-1, pp. 12-21.

長部 和雄 OSABE Kazuo

1933 「西夏紀年考」『史林』18-3, pp. 28-60; 18-4, pp. 105-128.

坂尻 彰宏 SAKAJIRI Akihiro

2002 「帰義軍時代のチベット文牧畜関係文書」『史学雑誌』111-11, pp. 57-84.

佐藤 貴保 SATO Takayasu

2003 「西夏法典貿易関連条文訳註」『シルクロードと世界史』森安孝夫 (責任編集), 大阪大学大学院文学研究科 (大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェ

- イスの人文科学」大阪大学大学院文学研究科・人間科学研究科・言語文化研究科  
2002・2003 年度報告書第 3 巻), pp. 197-255.
- 2006a 「ロシア蔵カラホト出土西夏文『大方広仏華嚴經』経帙文書の研究——西夏権  
場使関連漢文文書群を中心に——」『東トルキスタン出土「胡漢文書」の総合調  
査』(平成 15～17 年度科学研究費補助金(基盤研究 B)研究成果報告書),  
pp. 61-76.
- 2006b 「西夏の用語集に現れる華南産の果物——12 世紀後半における西夏貿易史の解  
明の手がかりとして——」『内陸アジア言語の研究』21, pp. 93-127.
- 沈 衛榮 SHEN Weirong
- 2007 「宗教的信仰と環境的必然性——11～14 世紀の中央ユーラシア・カラホト地  
域におけるチベット密教の実践——」井上充幸・加藤雄三・森谷一樹(編)『オ  
アシス地域史論叢——黒河流域 2000 年の点描——』京都, 松香堂, pp. 41-55.
- 史 金波 SHI Jinbo
- 1988 『西夏仏教史略』銀川, 寧夏人民出版社.
- 2002 「西夏の蔵伝仏教」『中国藏学』2002-1, pp. 33-49, +1pl.
- 史 金波 SHI Jinbo・白 濱 BAI Bin・呉 峰雲 WU Fengyun (編)
- 1988 『西夏文物』北京, 文物出版社.
- 史 金波 SHI Jinbo・白 濱 BAI Bin・黄 振華 HUANG Zhenhua・聶 鴻音 NIE Hongyin
- 1992 「西夏文『天盛新律』進律表考釈——西夏法典研究之一——」『西夏文史論叢  
(一)』銀川, 寧夏人民出版社, pp. 97-112.
- 高田 時雄 TAKATA Tokio
- 1988 『敦煌資料による中国語史の研究——九・十世紀の河西方言——』東京, 創文社.
- 1991 「五姓を説く敦煌資料」『国立民族学博物館研究報告別冊』14, pp. 249-268.
- 武内 紹人 TAKEUCHI Tsuguhito
- 1986 「敦煌・トルキスタン出土チベット語手紙文書の研究序説」山口瑞鳳(編)『チ  
ベットの仏教と社会』東京, 春秋社, pp. 563-602, -2pls.
- 2002 「帰義軍期から西夏時代のチベット語文書とチベット語使用」『東方学』104, pp.  
124-106 (逆頁), -4pls.
- 湯 曉芳 TANG Xiaofang (編)
- 2003 『西夏芸術』銀川, 寧夏人民出版社.
- TUCCI, G.
- 1949 *Tibetan Painted Scrolls*, 3 vols, Rome.
- URAY, G.
- 1981 "L'emploi du tibétain dans les chancelleries des états du Kan-sou et de Khotan  
postérieurs à la domination tibétaine." *Journal Asiatique* 269-1/2, pp. 81-90.
- 1988 "New Contributions to Tibetan Documents from the post-Tibetan Tun-huang." *Tibetan  
Studies : Proceedings of the 4th Seminar of the IATS*, Uebach, H. & Panglung, L. (eds.),  
Munich, pp. 516-528.

王 堯 WANG Yao

1978 「西夏黒水橋碑考補」『中央民族学院学報』1978-1, pp. 51-63 (再録あり) .

向 達 XIANG Da

1957 「西征小記 —— 瓜沙談往之一 ——」『唐代長安与西域文明』北京, 三聯書店, pp. 337-372 (初出:『国学季刊』7-1, 1950, pp. 1-24) .

山口 瑞鳳 YAMAGUCHI Zuiho

1985 「吐蕃支配期以後の諸文書」山口瑞鳳 (編)『講座敦煌 6 敦煌胡語文献』東京, 大東出版社, pp. 511-521.

吉田 豊 YOSHIDA Yutaka

1994 「ソグド文字で表記された漢字音」『東方学報 (京都)』66, pp. 380-271 (逆頁) .

張 雲 ZHANG Yun

1989 「論吐蕃文化对西夏的影響」『中国蔵学』1989-2, pp. 114-131.

Summary:

**Revisiting the Sino-Tibetan Bilingual Inscription of  
the Black River Bridge (黑水橋) from the Xi-xia (西夏) Period**

Takayasu SATO, Takatoshi AKAGI, Akihiro SAKAJIRI and Wu Zhengke

In a city of Zhang-ye (張掖) located in Gan-su province (甘肅省), China, there is an inscription bilingual in Chinese and Tibetan. In the text, it is stated that the inscription was built in the late 12th century during the Xi-xia (Tangut) period. The inscription also describes how a Xi-xia emperor Li Ren-xiao (李仁孝) performed rituals whereby he ordered the spirits abiding in the river to stem floods in the area.

Although the inscription was published some thirty years ago by Chinese scholars, we examined it in situ and made rubbings on which a fresh and detailed study of the text was conducted by us. Based on our new text and translation the following discoveries have been made:

(1) In view of the peculiar vocabulary and the format followed in the inscription, it is more than likely that the two versions were dependent on the original text drawn up in Tangut.

(2) The very fact that the emperor himself visited the place to perform the ceremony no doubt points to both strategic and commercial importance of Zhang-ye, which was a large oasis city located on the main route connecting Xi-xia and the western region.

(3) Zhang-ye had been conquered by the Xi-xia people 150 years before when Chinese and Tibetan populations occupied the area and when the society was bilingual in Chinese and Tibetan. Our inscription prepared by the local officials of Zhang-ye shows that the bilingualism survived even after the Xi-xia conquest of the region. It is well known that apart from Buddhism, its national religion, the Xi-xia kingdom also supported Confucianism and Taoism. The inscription shows that the emperors also believed in shamanistic religion. Thus, multilingual, -racial, and -cultural aspects of the Xi-xia kingdom is betrayed by it.